

ESTA TARDE VI GENTE CORRER[†]

— 対格前置詞 *a* の省略と意味について —

青 木 文 夫

(序 論)

Presuntos Implicados¹ の美しい曲 *esta tarde vi llover* の一節：

esta tarde vi llover
vi gente correr
y no estabas tú

この歌詞の中の *vi gente correr* は何故 *vi a (la) gente correr* じゃないのか。もしくは、*vi a (la) gente correr* とはどう違うのかという問題に対する理論言語学的な答えに対して、そこまで踏み込んで定式化しようとするのかというおぼろげな疑問を持っていたのであるが、統語理論が扱える部分とその外の部分がどうなっているかということを考えてみる必要があると思い、以下の論を展開する。

1. 有生性と対格の小辞 *a* について

青木 (2001) では対格の小辞 *a* が有生名詞の前に出現しない場合を、「対格を持つ名詞句は、それが有生名詞でなくても、[DP *a* NP] として常に生成され、*a* が素性を照合できない場合は音声的な spell out の段階で消去される」と説明した。

1. *Juan ama María.
2. *Juan leyó a la novela.

例えば、1 が非文法的なのは [DP *a* María] の *a* が素性照合された要素であるにも関わらず、

[†] 福岡大学非常勤講師 Tomás Marín 氏のご助言と、数名のインフォーマントのかたのご協力を心から感謝します。

¹ 公式 HP : <http://www.presuntos.com/>

spell out に受け渡された後に音声解釈が与えられないからであり、2については、*a* の持つ素性が照合を受けていないので、そのような要素は小辞の特徴として音声解釈には見えない (invisible) 要素であり、音声の実現がないということから説明した。それぞれ *Juan ama a María* と *Juan leyó la novela* が正しい派生となる。

この説明でもって一般的によく文法書に出てくる例を考えてみる。

3. ¿Cómo se sabe cuando un chico ama a una chica?
4. Yo buscaba una chica para completar el piso.

4 は典型的な例で、「直接目的語が特定な指示を持たない名詞の場合は *a* が省略される (ことがある)」といったような説明が初級のテキストではなされることが多い。またちょっと詳しい本だと、「llevar, traer, conocer, ver」といった動詞とは *a* があってもなくても正しい文になるが、*a* がある場合は、直接目的語による指示が話者にとってより具体的に感じられている」という説明が付け加えられることが多い。次のテキスト例を見てみよう。

5. (Internet のあるブログの頁より²)

Y desgraciadamente, el sistema de evaluación es un cuadernillo con preguntas de selección simple y en el metro *vi a una chica* copiando las respuestas de otro, sin tomarse la molestia de leerlo siquiera.

6. (Internet のあるブログの頁より³)

Bueno, esta mañana, mientras venía para acá, *vi una chica*, bastante bonita, que llevaba como veinte perros.

インフォーマント数名に確認したところ、5と6ともに文法性の問題はない。それでは5の *vi a una chica* と6の *vi una chica* には、よく言われているようにどれほどの指示性の違いがあるのだろうか。どちらの *chica* も話者にとってその指示物 (referente) がその場に存在した対象であったことは間違いなく、指示性に関しては3と4のような違いがないどころか、指示が具体的であるかどうかといった明示性 (especificidad) の度合いについてさえもこの後に述べる Torrego (1998・1999) で説明されているような差は微妙すぎて、インフォーマントにとってこちらが説明しても、キョトンとされるような程度のものであるとしか言えなかった。

では、対格の小辞 *a* が出現する・しないのメカニズムは何であろうか。この問題について Torrego (1998・1999) に従えば、*a* が消去されるのは動詞の相 (aspecto) が非完結的 (atélico)

² <http://www.encialetado.com/topocho/archives/000863.html>

³ <http://www.ateneuenciclopedicopopular.org/texto/Articles/Articles11.htm>

で、対格が付与された名詞が非明示的 (inespecífico) な場合に限られるとしている⁴。すると次の例は相が完結的 (télico) であるので、必ず *a* が必要になる。

7. Encarcelaron a un narcotraficante.
8. *Encarcelaron un narcotraficante.

非完結相の動詞、例えば Torrego (1999) の *besar* の例では、次のような対照が生じるとされている。

9. Besaron un niño.
10. Besaron a un niño.

9と10の *niño* はどちらも不定 (indefinido) の読みであるが、Torrego (1999) に従えば9は非明示的で、10は明示的 (または特定の: específico) であることになる。すなわち不定の読みは、9と10のどちらにおいても *besar* という動作の対象が *niño* によって構成される集合のメンバーであることだけを意味するが、9の場合にはそのメンバーについてそれ以上の限定がなされない。例えば、空間的な位置等でキスされた男の子をある個人に限定できない場合で、言い換えれば、男の子にキスしたという行為のみが表現されている文である。それに対し、10ではメンバーの個人化 (individualización) がなされ、誰か1人に限定された意味を持つ。例えば、名前などはわからなくても、空間的な位置や特徴などで (「そこに寝ているその男の子」のように) 対象を個人に限定できる文である。すなわち、非完結相の動詞にのみ非明示的な読みが可能であると同時に、その読みするときのみ対格の前置詞 *a* が省略できるとしている。例証として、次のような例を挙げている。

11. *Besaron un niño en un segundo.
12. Besaron a un niño en un segundo.
13. Besaron un niño llorando.
14. Besaron a un niño llorando.

12では終結 (terminativo) の副詞句表現である *en un segundo* が生起することによって、文がその表現によって強制された完結相の意味を持つのに対し、10では *a* が消去されることによって導かれる非明示的な読みと、文を完結相の読みに強制する表現が矛盾するので非文法的になると説明している。また、13と14では、明示的な読みが可能で14のみ *llorando* が *niño* を修飾する読み

⁴ 九州大学山村ひろみ教授の指摘で、ある記事の見出しに次の例があるとのこと。

(i) Encarcelaron camionero que arrolló a ciclista.

と不特定な行為者 (=pro) を修飾する両方の読みが可能であるのに対し、13では *niño* が非明示的な読みしか持てないので、後者の読みしかないとしている。さらに、Torrego (1998) では次の例をあげている。

15. *Laura escondió a un prisionero durante dos años.*

16. *Laura escondió un prisionero durante dos años.*

15では、ラウラが囚人だったある個人を2年にわたって匿っていたという読みになるが、16では、ラウラが2年にわたって、(明示的ではない1人の) 囚人を匿うという行為(場合によっては繰り返される行為)をしたという読みしかない。いわゆる Diesing (1992) で言われている前提的な (presuposicional) 読みと基数 (cardinal) の読みの違いである。このような違いは状態動詞の *conocer* などにも当て嵌まるとして、*conocen (a) un médico* における同様の意味の違いから *conocieron *(a) un médico deliberadamente* の文法性を説明している。

Torrego (1998・1999) は、この問題に対する詳細なデータといわゆるミニマリスト理論の立場からの記述を提供し、対格の小辞 *a* の素性照合の結果、*a* が消去される場合には [+animado (humano), -específico] という基本的な素性が関与していることも明らかにしていると言える。付け加えれば、青木 (2001) の枠組みに置き換えれば、*a* の [+específico] という素性と対格が付与された名詞の素性が照合されないと *a* がこういう小辞の特徴の特性として音声解釈を受けずに発音されないということになる。

では、こういった理論的な背景として、実際にスペイン語の話者がこういった文を発話したり聞いたりしたときの容認性と意味をどう捉えているかを見てみたい。その結果、そういった現象のいくつかが形式的な統語論の枠とその外側の語用論的な枠の間で揺れる部分があることを示してみた。

2. インフォーマントの判断

数名のインフォーマントに様々な例を提示して、文法性(または容認性)と意味の違いなどについて尋ねてみた。判断は次の4段階で行ってもらった。その指示は「その文が完全にダメなときは X、その文がダメだと思ってどこか通用するものがあるときは“??”、その文が多少おかしくても通じるときは“?”、正しい文には“○”でマーク」というものであった。(Marque con “X” cuando la frase es completamente mala, con “??” cuando la frase es mala pero queda algo pasable, con “?” cuando la frase es un poco extraña pero legible, con “○” cuando la frase es correcta.) 本論に関する主要な例の判断は次の通りである。

17 a. *Besaron a María.* ○

- b. Besaron María. X
 - c. Besaron a una niña. ○
 - d. Besaron una niña. ??
 - e. Besaron a una niña llorando. ○
 - f. Besaron una niña llorando. ??
- 18 a. Empujaron a María. ○
- b. Empujaron María. X
 - c. Empujaron a una niña. ○
 - d. Empujaron una niña. ??
- 19 a. Trajeron a un muchacho a la fiesta. ○
- b. Trajeron un muchacho a la fiesta. ?
- 20 a. Llevarán a una chica a la fiesta. ○
- b. Llevarán una chica a la fiesta. ?
- 22 a. Llevaré una chica que sepa bailar bien. ?
- b. Llevaré una chica que sabe bailar bien. ?
 - c. Llevaré a una chica que sepa bailar bien. ○
 - d. Llevaré a una chica que sabe bailar bien. ○
- 23 a. Necesito una chica para cuidar a los niños. ○
- b. Necesito a una chica para cuidar a los niños. ○
- 24 a. Vi gente en la plaza. ○
- b. Vi a gente en la plaza. ?
 - c. Vi a la gente en la plaza. ○
- 25 a. Vi gente correr en la calle. ○
- b. Vi a gente correr en la calle. ?
 - c. Vi a la gente correr en la calle. ○
- 26 a. Vi gente que se moría en la calle. ○
- b. Vi a gente que se moría en la calle. ○

- c. Vi a la gente que se moría en la calle. ○
- 27 a. Busco chica para compartir piso. ○
b. Busco una chica para compartir piso. ○
c. Busco a una chica para compartir piso. ○
- 28 a. Se busca chica para olvidar otra. ○
b. Se busca una chica para olvidar otra. ○
c. Se busca a chica para olvidar otra. ?
d. Se busca a una chica para olvidar otra. ?
- 29 a. Conozco una chica de dieciséis años. ○
b. Conozco a una chica de dieciséis años. ○
c. Conozco chica de dieciséis años. ?
- 30 a. ¿Cómo se sabe cuando chico ama chica? X
b. ¿Cómo se sabe cuando un chico ama una chica? ?
c. ¿Cómo se sabe cuando un chico ama a chica? X
d. ¿Cómo se sabe cuando un chico ama a una chica? ○

各例の右に示した判断は全員の平均ではなく、それぞれ一番緩やかな判断をしたものを、その中でも言語学的方法を多少とも理解している1人と質疑と議論をした結果から出したものである。実際のインフォーマント全体の判断はもっと厳しいもので、17d、17f、19b、20bにはXのほうが多く付けられたし、?の例にも??やXが付くこともあった。

こういうインフォーマントによる判断の揺れや理論の予測とのずれは、理論言語学の中核研究の立場では、ある種のバイアスとして説明され、実際に言語学的知識を持つインフォーマントの微妙な判断が理論の成立を支えてきたと言えるが、逆に言語学的知識を持つが故に、理論に整合するように例文を判断してしまうという危険が孕んでいるのも事実であろう。筆者も自分の研究において、そのような立場をとってきたのは事実で、全てを形式文法の枠組みで説明しようとするあまり、語用論的な要因や話者の主観などが加わった現象を見過ごしてきたのかもしれないと思っている。以下では、まだまだ未完成ではあるが、*a*の消去には、形式的な記述の大枠は保持しながらも、語用論的な要因、すなわち個々の動詞の意味と目的語の名詞の指示や有生性の度合いに関する話者の運用の要素が深く関わっているのではないかということ述べてみたい。

3. *a* の消去と文法性

17d と 18d について、Torrego (1995) では 18d については完全に非文法的で、上でも見たとおり 17d は非明示的の不定 (*indefinido inespecífico*) の読みで適格とされている例である。*besaron a una niña* が *pro_{arb}* の解釈であることを確かめるために、この例が *se besó a una niña* と同じ意味であることを確認し、次に *besaron una niña* が良い文だとしたら *se besó una niña* (この文は彼らにとって完全に非文法的) の意味であり、さらに、どちらの文も「だれかがキスするたびに違う女の子にした」という意味にもならないことを確認したうえで⁵、その文法性は上のような判断であることが得られた。また、Torrego (1998) は非明示性の傍証として、17e では、*llorando* は主語の *pro_{arb}* と明示的な読みの *niña* のどちらも修飾でき、17f では、*llorando* は非明示的な *niña* を修飾できず、主語を修飾する読みしかないとしている。この対照について、17e は Torrego (1998) の予測通りであるが、17f については文法性にほとんど救いがないとしながらも、仮に容認できるとしても 17e と同じように2つの読みが可能だと判断している。

このような判断が何を示しているのかと言うと、17d のような例は、19b、20b、23a、27a、29a などのような比較的よく用いられ、非明示的な読みが容易にわかるような例とは違い、現実には発話されることがなく、明示性と非明示性の違いも非常に希薄なものでしかないのである。故に、この間 *besaron una niña* のような例について尋ねるときは、いつも *si fuera pasable* と断りをつけて質問していたし、答えには *aunque es poco pasable* と書かれることが頻繁であった。それ以外の例、すなわち一般の文法書でもよく言及されている *traer*、*llevar*、*conocer*、*buscar*、*necesitar* などについては問題はなさそうであるが、これらについても普通のインフォーマントの感じ方は明示性ということよりも有生性の有無に関わっていることがわかってきた。

或るインフォーマント (匿名) のコメントは次のようなものであった (原文のまま)。

31.

En algunos casos depende si el hablante piensa que la persona es una persona o un objeto. Por ejemplo, *llevar a una chica a la fiesta* puede ser como invitada (persona) o como puta contratada (objeto). Una chica para cuidar niños es una persona pero suele pensarse más como herramienta que cuida. En el caso del verbo *necesitar*, si se dice el nombre de la niñera, entonces es un ser humano 100%. En este caso se necesitaría “a”.

(このコメントの中で *cuidar niños* と *a* を使っていないのが注目される！)

⁵ Torrego (1998) の16の例についても文法性の判断は別として、繰り返しの動作の解釈でも複数の囚人を匿ったという読みはないとのことだった。

⁶ google やスペイン語の Data Base などで検索してみるとわかる。かなりしつこく *besar+un/una*+人間名詞の単数形の例 (*a* がいない場合) を探してみたが、見つからなかった。*buscar* や *necesitar* なら、あつという間に数十を超える例が出てくる。

関与している基本的な要素が、動詞の意味（非完結相の動作動詞、状態動詞、心理動詞など）、対格の位置の名詞の有生性と明示性であることは、形式文法の枠組みでの説明としては正しいであろう。しかし、*a* の有無の決め手の基本はやはり有生性であることを、こういったインフォーマントの判断がはっきりと示していると思う。

4. 有生性と統語論の関わり

有生素性がどんな統語的現象に関わっているかということと、統語的にどの程度有意義な素性であるのかということを考えてみたい。

- 32 a. Buscaba un joven que pudiera acompañarme.
- b. Buscaba a un joven que podía acompañarme.
- c. Buscaba un piso dúplex que tuviera una terraza.
- d. Buscaba un piso dúplex que tenía una terraza.

32b と 32d での *a* の有無を決めるのは [+/-animado (humano)] であって [+/-específico] ではないということである。仮に 32a と 32b の間の *a* の有無に明示性が関与していても、32b と 32c-d の対照に関わっているのはあくまで有生性である。

その点について、青木 (2001) でもとりあげた Ormazabal (2000) の有生効果 (animacy effects) を考えてみよう。

- 33 a. *Te (la) llevamos a ella.
- b. La llevamos a ella a casa de Jorge.
- c. Te (lo) llevamos a mi hijo.

Ormazabal (2000) が提案した 33a の非文法性の解決策は次のようなものである：*ella* のような 3 人称の強形の代名詞（及び 1、2 人称は接辞代名詞も含めて全て）は内在的に強い有生素性を持つので、その素性は *v/T* の [+animado] の素性によって照合を受けることになるが、33a においては *te* が持つ内在的素性のほうが *v/T* に近く (minimal link condition)、*v/T* の素性はすでに照合が済んでしまっているため、*ella* の素性照合ができない。一方、33b では *v/T* の素性は *ella* の素性の照合以外には使われずに残っているので適格な文になる (*la* には内在的有生素性はない)。さらに、固有名詞や普通名詞には内在的有生素性がないというのが Ormazabal (2000) の主張なので、33c は、*mi hijo* にそのような内在的素性がなく照合を受ける必要がないため文法的になる。

Ormazabal (2000) の主張の妥当性はともかく、有生性ということについて代名詞が普通名詞や固有名詞と振る舞いが異なることは、34と35が示すように強形の代名詞の前では例外的な場合を除

いて *a* の消去が認められないことから言えるかもしれないが、33c の *mi hijo* に有生性がないとか関与しないということが言えるのかどうかまでははっきりしないし、疑わしいと考えられる。

34. *Vimos* * (a) *él*.

35. *Juan* *presentó* (a) *usted* a *María*.

35はいわゆる *a__a__* 構文であり、通常 *presenté a Juan al director* のような文で最初の *a* の句が対格と解釈されるときに *a* を省いてよいされるが、*a* のあとが強形の代名詞の場合には人によって判断が異なる。35のように *a* のあとが3人称の代名詞のときだけ（とくに *usted* が *él* や *ella* に比べかなり良いとするインフォーマントが多い）容認性が比較的高く判断される。こういった場合をどう説明するのかという問題は残るが、通常の場合に強形の代名詞が内在的な有生素性を持ち、その照合（認可）は必ずなされないとはいけないわけである。ところが、Ormazabal (2000) の立場では、逆に言うと、普通名詞や固有名詞では内在的な有生素性を持たないことになり、仮に名詞が非明示的な素性をもつ場合に *a* が消去できると定式化しても、その非明示的な場合にどうやって36のような例を排除できるのかという問題が未解決だと思われる。

36. **Le vimos un chico*.

仮に36の *un chico* の非明示性と重複された接辞代名詞を含む *v/T* が明示性の照合を要求して、その素性照合ができないということを仮定しても、さらに、次の例をどうやって排除するのかという問題が生じる。

37. **Le vimos él*⁷.

もし内在的な有生性の照合が接辞代名詞が組み込まれた *v/T* の素性との照合で認可され、さらにその *v/T* によって明示性も照合されるときも、37では *a* がなくても *él* の内在的な有生素性と明示性は認可されてしまい、正しい収束をすることになる。言い換えると、接辞代名詞の重複がない *vi a él* のような場合には *él* の持つ内在的な有生素性の認可はどう考えても *a* が担うと思われるのに、重複が起きている *le vi a él* のような場合にはすべての照合について *v/T* の素性が担うという役割分担が提案されているわけであり、内在的ではない有生素性の有無を含め、この考え方が妥当かどうかには疑問の余地がある。それ故に、青木 (2001) では対格を付与された名詞はすべて NP が有生素性を持つ持たないに拘らず [_{DP} *a* NP] という構造で merge されると提案したわけである。この説明では、DP 内部の *a* は冠詞とともに限定詞 (*especificante*) の位置にあり、主要部

⁷ この手の重複に関しては当方のインフォーマントにスペイン人が多く、*le* を好むイベリア半島スペイン語 (*español peninsular*) で対応した。以下の例もそちらを用いる。

N との間で何らかの素性照合がなされれば *a* は音声解釈を受け、素性照合がなされない場合は、その素性は或る種の弱い素性と考えて、それが残る派生は統語的に収束するが、音声解釈にはその素性が見えない (invisible) ので *a* の発音がなされないと考えた。この考え方には問題がないわけではない。少なくとも、素性照合がされていない派生が収束するというのは厳密な完全解釈の原則に抵触するわけで、さらに緻密な定式化が必要であるが、このことは最後の章で扱うことにする。ここで主張したいのは、*a* は有生素性の照合に関わっているということを言うに留める。

この考えを Torrego (1998・1999) に照らしてみると、Torrego 自身もその照合が統語的なプロセスであることは明言していないが、仮に素性照合というメカニズムに訴えるならば、DP 内部に *a* が merge された場合、それが認可するのは有生素性ではなく明示素性だけだということになる。以下ではその妥当性を考えてみたい。

5. 小辞 *a* の素性照合

素性照合を整理するために次の例を考える。ここで注意するのは、スペイン語における接辞代名詞の重複は *a*+ 有生名詞に限られるということである⁸。

- 38 a. Le vi al chico.
- b. *Le vi el chico.
- c. Le vi a un chico.
- d. *Le vi un chico.
- e. *Lo vi al coche.
- f. *Lo vi el coche.
- g. *Lo vi a un coche.
- h. *Lo vi un coche.

もし文法が、名詞が持つ素性として強形の代名詞にだけ内在的有生素性を認め、それ以外には認めず、不定名詞の持つ明示性のみでこういった例を認可しようとすれば、どう考えても 38b、38e、38f、38g の派生を適切に防ぐことができない。というのは、*a* と有生性というごく一般的な事実が棚上げになってしまっているからである。すなわち、38にあげた例から説明したいことは、*a* が出現するのは有生素性を持った名詞の前、すなわち有生素性と *a* はなんらかの照合の関係にあるということである。38a で *el chico* が明示的であることや、38c で *un chico* が非明示的には解釈されないことや、38e が特別な比喩的意味 (そのクルマが生き物のような場合) 以外では容認できないからといって、明示素性だけが関与しているとは言えないということである。言い換えると、名

⁸ *este libro, me lo compró Juan* のような左方転移や話題化は別の現象として考えるのは、従来の多くの文献で述べられている方向に従う。

詞の前で *a* が消去されると、それが有生名詞であってもなくても接辞代名詞との重複はできないわけであり、有生性による *a* の出現が接辞代名詞との重複に対する最初の判断基準であり、*a* の消去に非明示性が関与して接辞代名詞の重複が妨げられるのは、有生性での照合の次のプロセスにすべきである。もう少し説明すると、*le vi al chico* や *le vi a un chico* が OK で、*lo vi al coche* や *lo vi a un coche* がダメなのは単純に有生性の問題であるべきで、*lo vi el coche* や *lo vi un coche* がダメなものと同じ理由である。それで問題は *38d* が非文法的かということに限定されることになると思う。説明しようとしていることは Torrego (1998・1999) と同じく *a* の消去がテーマであるが、この論ではあくまでそれは有生性によって判断され、そして、*38d* やこれまでに見た例、例えば *18d* がかなり悪くて、*23a* が OK なのは、その次の段階での判断基準によって説明すべきであると考え。そして、その中に Torrego (1998・1999) が主張する非明示性や非完結相も関与していると考えほうが自然な文法のメカニズムである。ただし、このことには広範は議論が必要なのは言うまでもない。次の章では、この点について議論する。

6. *a* の消去：文法と運用の役割分担にむけて

2章と3章で述べた文例と判断について、もう少し掘り下げてみたい。インフォーマントとのやりとりでわかったことに次のようなことがある。

まずは以下に再掲する次の例について：

15. *Besaron un niño llorando.*
16. *Besaron a un niño llorando.*

Torrego (1998) では、15の *llorando* は *niño* を修飾する意味 (*besaron un niño que lloraba*) にはとれないと述べているが、全員がこの文の容認性に疑問を持つも、解釈は16と同じように2つとも可能だとする。その追試として、次のような例をいくつか提示してその解釈を尋ねたが答えはいずれも2通り可能というものであった。

- 39 a. *Vi a una chica corriendo por la calle.*
- b. *Vi una chica corriendo por la calle.*
- c. *Vi a una chica llorando.*
- d. *Vi una chica llorando.*

そこで、1章で見た5と6の *ver* の例に戻るが、*vi una chica* について或るインフォーマント(匿名)のコメントを紹介する。

40.

Vi una chica: Este tipo de frase lo escucho con frecuencia, puede ser un vulgarismo o también podría pensar que se usa “a” o no se usa para diferenciar entre ver = 見る・会う y ver = 見える。

このインフォーマントは 39b や 39d はほとんど容認できないとするが、興味深いのは22の例であり(再掲)、驚くべきものである。

- 22 a. Llevaré una chica que sepa bailar bien. ?
- b. Llevaré una chica que sabe bailar bien. ?
- c. Llevaré a una chica que sepa bailar bien. ○
- d. Llevaré a una chica que sabe bailar bien. ○

伝統的な説明では、22a と 22d が正しくて、22b と 22c は非文法的であるはずだが、或るインフォーマントにとって、32であげた典型的な *buscar* の例とは異なり、*llevar* の場合はどれも可能だと言う。その基本にあるのは *llevar* は人間名詞の前で *a* の消去ができないという感覚を持っているということらしい。このあたりを詳しく尋ねてみると、このインフォーマントにとって 22c と 22d の違いは「(ガールフレンドの) 女の子を連れていくんだけど、その子はダンスが上手いとわかっている場合が 22d で、ひょっとしてダンスが上手いかもかもしれないという場合が 22c」と説明し、22a と 22b については「関係節の直説法と接続法の違いは 22c と 22d のような違いに対応するが、22a と 22b の場合には女の子をただ単にダンスの相手の道具のような感じとして見ていて、その子とはガールフレンドなどの個人的な関係は何もない」ということらしい。このインフォーマントの説明を鵜呑みにするわけではないが、17から36の例を眺めたとき *buscar*、*necesitar*、*conocer* といった典型的に *a* の有無によって意味の差がはっきりする例を除いては *a* の消去がそこに記した容認性以下にしか判断されないのは事実である。こういった動詞と後述する集合名詞の *gente* が目的語になる場合 (26a, b, c が典型的) を含めた例だけが完全に適格な文である。

これによって明示性 (及び非完結相) の関与を否定するわけではないが、普通の話者にとって、目的語で表現されている何かが人間ではなく対象物のように感じられるというのが非明示性の実際の姿であり、そういう違いがはっきりとする動詞 (上述のいくつか) による例のみしか実際には発話されないわけである。

傍証として、*buscar*、*necesitar*、のように *a* の有無によって明示性による意味の違いが比較的はっきりと生じる動詞と、*ver*、*llevar*、*traer*、*conocer* のように *a* の有無による差が非常に微妙な動詞の用法の違いに単数形での不定冠詞の省略がある⁹。最近インターネット上で流行の出会い系サイトに *buscar chica* とか *necesitar chico* といったフレーズがよく見かけられ、その文法性には問題

⁹ このことはすでに見た *besar* などについても当て嵌まる。

を感じないが、*ver* には皆無とは言わないけれど、*ver chica bonita* のように不定冠詞 *una* の省略を認めるインフォーマントは筆者のまわりにはいない。なお、*buscar a chica* というように *a* がある場合に不定冠詞が省略されたフレーズは非文法的である。このことは 27a や 28a の例からも言えることである。

裸単数名詞と不定冠詞が付いた単数名詞の間には意味の違いがある。

41 a. El niño no trajo una pelota.

b. El niño no trajo pelota.

41a は NEG の scope が *una* よりも広い解釈（子供はボールを一つも持ってこなかった）と逆の scope の意味（子供が持ってこなかったボールが一つある）の両方を持てるのに対し、41b は NEG が広い解釈しか許されない。これに対して肯定文のほうは不定冠詞が付いても付かなくてもどちらもあいまいな解釈の文になる。

42 a. Nicolás está buscando una casa.

b. Nicolás está buscando casa.

42a と 42b のどちらも「ニコラスが何でもよいから家を探している」という意味と「ニコラスが探している家が1軒ある」という解釈が可能である。これらは Miller y Schmitt (2005) からの例であるが、彼女たちによると、否定文における 41a と 41b の意味の違いは習得の早い段階で子供が区別できることを論じている。どういった動詞との組み合わせで裸単数形が可能であるかについては、Miller y Schmitt (2005) も参考にしている Bosque (1996) に詳しく述べられているので、その点については省くが¹⁰、このことから分かるのは、否定文で NEG の Scope が広いということは裸単数形の解釈はいわゆる Torregó (1998・1999) の非明示的な読みにしかならないということである。しかしながら実際には 42b の例に「何でもよいから家を探している」の読みしかないとするインフォーマントがいる。このことは以下に再掲する次の例からも分かる。

27 a. Busco chica para compartir piso. ○

b. Busco una chica para compartir piso. ○

c. Busco a una chica para compartir piso. ○

28 a. Se busca chica para olvidar otra. ○

¹⁰ いわゆる語彙分解 (decomposición léxica) による意味素性としての [tener] が生じる動詞 (*buscar* は結果としてその意味が生じるし、*necesitar* も同様) が典型的に裸単数形を許容するというのが本論とも関わる点であることだけ述べておく。

- b. Se busca una chica para olvidar otra. ○
- c. Se busca a chica para olvidar otra. ?
- d. Se busca a una chica para olvidar otra. ?

上でとりあげた *besaron un niño* が仮に容認される例だとしても **se besó un niño* は容認されない。それに対し 28a と 28b から分かるように *buscar* となら *se* の構文も OK であり、さらに裸単数形も可能である。これらの例に関して、27a と 28a はどちらも 27b と 28b に対応していて、それぞれ 27c と 28d の解釈（要するに明示的な読み）にはならない。言い換えると、*besar* も *buscar* も非完結相の動詞なのに、*se* の構文に関して *besar* は非明示的な有生名詞と共起できないのに対し *buscar* では共起できるという正反対の事実があることは *a* の消去ということが動詞が完結相かどうか以外の意味によって算定されている可能性を示していると言える。

興味深いのは 28d の容認性が落ちることである。この文は文法的には問題ないと思われるが¹¹、*para olvidar otra* という句があることで意味的に「誰かを忘れるためにだれでもよいから女の子を探している」という意味にしかとれないと言う訳である。しかし、27c では「アパートを共有するために1人の女の子を探している」という意味であるが、この場合は探しているのが「私」であり、特定の女性（例えば学生の一人）が想定できる文になっている。この差は文法的なものではなく、いわゆる文の運用に関わる部分から判断されているとしか言いようがない。では、*a* が出現しない文はどうやって merge されるのだろうか。

スペイン語の *vp* の句構造を考えた場合、基本になる構造は [_{vp} ... [_{VP} V [_{DP} ... [_{NP} ...]]] である。問題は対格の小辞 *a* がどのように DP 内に merge されるかということで、いろいろな方法があるが、どれにも何らかのコストがかかることが分かる。有生名詞に対しては [_{DP} *a* NP]¹² または [_{PP} *a* DP] とし、無生名詞には [_{DP} NP] と区別するにしても、一律に [_{PP} *a* DP] または [_{DP} *a* NP] として無生名詞のときに *a* を音声的に解釈しないとしても、また常に [_{DP} NP] としておいて素性の解釈などによって後から音声的に *a* を挿入するにしてもである。さらに、対格の *a* が本当に前置詞であるかどうか、すなわち構造的に PP かどうかとも議論のあるところで、まだまだ未解決であると言わざるを得ない。これが時制や一致 (agreement) のようなはっきりと強い素性であれば話しは簡単であるが、その特性を統語論ですべて扱うことができるかどうかははっきりしない有生性という問題に関しては、統語的記述はある程度過剰生成的に最大限包括的に扱えるようにして、論理に矛盾が生じない範囲で、それを文法の外、すなわち運用や語用論で扱うときの処理が容易で簡潔になるような記述になるべきであり、実際にそうなっていると考える。

その観点とここまでの事実から提案したいのは、統語的には、有生性という名詞の自然な意味素性として語彙項目の記載に含まれるレベルまでの記述に留め、その名詞の指示が外界においてどの

¹¹ スペイン語の corpus (CREA) で *se busca a* で検索すればいくつかが出てくる。

¹² 青木 (2001) でこの構造を提案した意図は、対格の付与はあくまで DP に対してなされ、仮に [_{PP} *a* DP] を仮定すれば DP (NP) の格素性がチェックを受けるために V の限定詞の位置に移動 (move) するか attract されるの
に問題があるのではないかということを考えていたからである。

ように解釈されるかといった明示性を含めた部分と実際にその文がどのように発音されるかについては、話者が外界と思考をつないだ状態で判断される問題であり、形式的な問題とは区別したい。また、その判断には話者によってかなりの揺らぎがあり、本来の意味論では決められない部分も多くあるので、その判断の基になる構造は説明的妥当性を満たしながら、後の段階の派生に無理がないように記述すべきであることは言うまでもない。

そこで今までで統語的に記述すべきことをまとめると、(a) 有生索性を持つ名詞と持たない名詞があり、有生性が認められれば対格の *a* が名詞の前に出現する。(b) *tener* や *haber* など *a* が出現しない動詞がある。(c) 有生名詞でも有生性の程度が落ちると話者に判断される文脈では *a* が出現せず、また、無性名詞でも有生性を話者が感じたりするような文脈で *a* が出現することがある。(d) 強い有生索性に対しては *a* が義務的であり、少なくとも *mí* と *ti*、場合によっては Ormazabal (2000) の主張するように強形の代名詞 *él*, *ella*, *usted* などにも当てはまる¹³。

言語学的知識を持たないインフォーマントに、*Vi una chica* と *vi a una chica* や、*vi gente que sufría* と *vi a gente que sufría* のような例をどう思うかを尋ねると、それぞれ前者には *objetivo*, *abstracto*, *colectivo*, *como cosa*, *vago* といった言葉が、後者には *subjetivo*, *concreto*, *individual*¹⁴, *como persona*, *más cercano*, *visualizado* といった言葉が説明の中に出てくる。ということは漠然とだけでも話者が認識している対象に対してどの程度有生性を感じているのかの度合いによって *a* が消去されるかどうかが決まり、明示性といったこともそのことに付随して生じる説明であるということを示唆している。故に、少なくとも有生名詞に関しては一律に [DP *a* NP]¹⁵ の構造で merge され、有生性が統語的に照合された場合は *a* の音声 matrix を含めた素性の集合が発音の解釈の部門に持ち越されると提案する。すなわち、*vi a una chica* も *vi una chica* も [vp (yo) [vp vi [DP *a* una [NP *chica*]]]] として merge されることになる。理由を一つだけ述べれば inclusiveness の条件である。常に [DP NP] としておいて素性の解釈などによって後から音声的に *a* を挿入する説明は、それが音声 matrix であっても inclusiveness の条件に抵触するし、恐らく C_{LH} もそれは避けるようになってはいるはずである。

7. 結 び

ユニセフ (Unicef) のインターネットの頁に次の文章があった¹⁶。

¹³ 前のほうで述べた *a__a__* 構文のほか、Aoki (1997) でも述べた *haber* と *a* の消去についての現象がある。**Había yo/mí*. (*tú* と *ti* についても完全にアウト) なのに対し、*Había usted*. (*él* と *ella* についても同様であるが、*a__a__* 構文ときと同じように *usted* のほうが容認度が高い) は文法的ではないが、発話されてもおかしく感じないという意見がある。

¹⁴ こちらで *individualizado* ではと補ったら、そちらがずっと良いと答えた。*individualizar* はかなり難しい言葉らしい。

¹⁵ [PP *a* DP] と [DP *a* NP] のどちらが良いかについてはここでは結論を出さないが、素性照合や格照合などの理論内部の問題に照らして解決されるので、そんなに難しい問題ではないと思う。筆者は暗に [DP *a* NP] が妥当であるとだけ述べるに留め、以下の論を提案する。

¹⁶ 引用先の HP : <http://www.unicef.org/spanish/specialsession/activities/security-council.html>

43.

Wilmot, un joven de 16 años de Liberia, describió cómo hace 11 años él y su madre tuvieron que huir de su hogar debido a la guerra civil. “Yo era muy pequeño entonces para comprender realmente lo que ocurría”, dijo. “Escuché el sonido de las pistolas. Vi a la gente correr. Vi a gente que disparaba. Vi a gente que mataba. Vi a gente que se moría. Había gente tan joven como yo que estaba muriéndose.

この文章と24から27までの例（下に再掲）を判断したインフォーマントのコメントが44である。それによれば、はっきりと 24b と 25b の容認性が落ちて、26b には問題がないことを物語っている。

- 24 a. Vi gente en la plaza. ○
b. Vi a gente en la plaza. ?
c. Vi a la gente en la plaza. ○
- 25 a. Vi gente correr en la calle. ○
b. Vi a gente correr en la calle. ?
c. Vi a la gente correr en la calle. ○
- 26 a. Vi gente que se moría en la calle. ○
b. Vi a gente que se moría en la calle. ○
c. Vi a la gente que se moría en la calle. ○

44.

Respecto a la gente si no se explica qué grupo de gente es, por ejemplo poniendo el artículo “la” etc. o explicitando que es gente “que se muere”, generalmente no se utiliza “a”. En caso de explicar sí se usaría “a”.

少女の叫び：Vi a la gente correr. Vi a gente que disparaba. Vi a gente que mataba. Vi a gente que se moría. Había gente tan joven como yo que estaba muriéndose. 逃げまどう人たち、銃を撃つ人たち、誰かを殺そうとしている人たち、死に逝く人たち、その姿がはっきりと少女の目の前に映しだされ、今でもその姿が脳裏から離れない。しかし、Soledad (Presuntos Implicados のボーカル Soledad Jiménez) は歌う：Esta tarde vi llover. Vi gente correr. Y tú no estabas. 雨が降っているのも、人々が歩いているのも単なる遠くの情景にしか過ぎない。はっきりしているのはあなたがいないかったことだけ。その違いは、生きようとしている、生きたいと願う人の命のある姿を描

く気持ちと、表情もなくただ動いていくだけのロボットの群れにしか映らない対象物。その違いは、命が感じられるか、感じられないかの違い。その命を *a* という小さな言葉が吹き込むのであろう。

(参 考 文 献)

- Aoki, Fumio(1997): "Case and Morphology of Romance Pronouns: Accusative Pronouns in Spanish." *Studies in English Linguistics: A Festschrift for Akira Ota on the Occasion of His Eitieth Birthday.* (eds. M. Ukaji, T. Nakao, M. Kajita and S. Chiba), 171-180. Tokyo, Taishukan-Shoten.
- 青木文夫 (2001): 「対格の前置詞 *a* と有生性について」『福岡大学総合研究所報』、243、63-67。
- Bosque, Ignacio(1996): "Por qué determinados sustantivos no son sustantivos determinados." *El sustantivo sin determinación: la ausencia de determinante en la lengua española.* (ed. Ignacio Bosque), 13-120. Madrid, Visor Libros.
- Chomsky, Noam (1995): *The Minimalist Program.* The MIT Press.
- Demonte, Violeta (1994): "La ditransitividad en español." *Gramática del español.* (ed. Violeta Demonte), 431-470. El Colegio de México.
- Diesing, Molly (1992): *Indefinites.* The MIT Press.
- Laka, Brenda (1995): "Sobre el uso del acusativo preposicional en español." en Pensado ed. (1995), 61-91.
- Miller, Karen y Cristina Schmitt (2005): "The Interpretations of Indefinites and Bare Singulars in Spanish Child Language." *Selected Proceedings of the 6th Conference on the Acquisition of Spanish and Portuguese as First and Second Languages.* (ed. David Eddington), 92-101.
- Ormazabal, Javier (2000): "Conspiracy Theory of Case and Agreement." *Step by Step.* (eds. Roger Martin, David Michels y Juan Uriagereka), 235-260. The MIT Press.
- Pensado, Carmen. ed. (1995): *El complemento directo preposicional.* Madrid, Visor Libros.
- Torrego, Esther (1995): "On the Nature of Clitic Doubling." *Evolution and Revolution in Linguistic Theory.* (eds. Héctor Campos y Paula Kempchinsky), 399-418. Georgetown University Press.
- _____ (1998): *The Dependencies of Objects.* The MIT Press.
- _____ (1999): "El complemento directo preposicional." *Gramática descriptiva de la lengua española.* (eds. Ignacio Bosque y Violeta Demonte), 1779-1805, Madrid Espasa Calpe.